戦後日本のメディア文化と「戦争の語り」の変容

福間良明（立命館大学）

戦後初期の日本では、軍部批判や「反戦」の規範が社会的に共有された。戦没学徒遺稿集をもとにした映画『きけ、わだつみの声』（1950 年）の大ヒットは、そのことを物語る。それは、ＧＨＱ占領下であったこととも無縁ではなかったが、他方で、「反戦の正しさ」は、戦争遂行を積極的に支持した過去から目を背けることとも、表裏一体だった。

占領が終結すると、こうした動きへの違和感から、戦時期の当事者の複雑な心情に焦点を当てる戦争映画（『雲ながるる果てに』1953 年など）も見られた。1960 年代後半には、「無意味な死」に着目した特攻映画『あゝ同期の桜』（1968 年）も作られた。その背景には、戦中派（終戦を 20 歳前半で迎え、最も多く戦争に動員された世代）とそれ以下の世代の間の「戦争体験の断絶」が関わっていた。もっとも、世代間の軋轢は、結果的に「加害」をめぐる議論を活性化させた。ベトナム戦争をめぐる新聞・テレビ報道も、間接的にこうした動きを後押しした。

他方で、1960 年代後半以降、靖国神社国家護持運動など、「死者の顕彰」をめざす動きも目立った。だが、死者の死の間際の心情にこだわるところから、顕彰の政治性を拒み、国内外への責任を模索する動きが、知識人言説のなかでも、また戦争映画（『あゝ決戦航空隊』1974 年など）でも見られた。

本報告では、戦争映画と同時代の知識人言説を対比させながら、「体験」「責任」「加害」をめぐる議論が生み出される背景とともに、その可能性や限界について検討したい。

■福間良明（ふくま・よしあき／FUKUMA, Yoshiaki）
1969 年、熊本市生まれ。1992 年、同志社大学文学部社会学科新聞学専攻卒業。出版社勤務を経て、2003 年、京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。香川大学経済学部准教授を経て、現在、立命館大学産業社会学部教授。専門は歴史社会学・メディア史。
主な著作：『「戦争体験」の戦後史――世代・教養・イデオロギー』中公新書、2009 年。『戦後日本、記憶の力学――「継承という断絶」と無難さの政治学』作品社、2020 年。『司馬遼太郎の時代――歴史と大衆教養主義』中公新書、2022 年。